

シグレの柔らかい太ももが、私の腰に絡みついてくる。彼女の胸の谷間には、私の精液がべっとり白く残っている。その光景を見るだけで、再び下半身が熱く膨張する。

「……またそんな目で見てる」

シグレは呆れたように息を吐き、けれど腰の動きは止めない。

「ホントこれ、好きだよな、先生。」

最初に胸で射精して、それを見て興奮して中出しの回数が増えるってやつ」

「……嫌だった？」

「別に。付き合うよ、いつものことだし。……ふふっ、気持ちよさそうな顔してる」

くちゅ……くちゅ……と、結合部からゆっくりとした水音が漏れる。

「ちょっと体勢変えるね」

シグレがそう言っつて腰を浮かせ跨がってくる。
彼女の重みが腰に乗った。

「先生、毎回だいたい6回くらいは
中に出すまで止まらないでしょ。最初のうちは
私が動くから、体力残しときなよ」

当たり前のようにそう言っつて、
シグレは自分から腰を沈めてくる。
ぬぷっ…と奥まで咥え込み、ゆっくりと上下を始めた。

下から見上げると、
精液で汚れたままの胸が大きく揺れている。

その光景だけで、
射精感が一気に押し寄せてくる。



シグレの腰が深く沈み込んだ瞬間、限界が来た。
びゅるっ………！ びゅるるっ………！
大量の精液が、彼女の中に勢いよく注ぎ込まれる。

「んあぁっ………熱い………いっぱい出てる………ふふっ」
シグレは腰を密着させたまま、楽しそうに息を漏らす。
彼女自身もびくびくと震え、
明らかに気持ちよくなっているのがわかる。

「………まだ続ける？ 抜かなくていいよね？」
「もちろん！」

即答すると、シグレは軽く笑って腰を再び動かし始めた。

ぬちゅ…ぬちゅ…と、
すでに中に出した精液が混じった音が、
布団の上に響いていく。





